

2022/01/26 公開



ごうちゃんねる (GO-CHANNEL)
艱難時代の目的その 2—史上空前の大リバイバル到来！

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



お元気ですか。高原剛一郎です。聖書は多くのページを割いて艱難時代の預言を語っています。では、なぜ艱難時代があるのでしょうか？ 悪がのさばり 大暴れする期間を 7 年間も、なぜ神はほったらかすんですしょう？ もっと手取り速く ピシャッと止めさせることができるはずなのに、なぜ、神は艱難時代が起こるのをお許しになるのでしょうか？ 3 つの目的があります。今日は 2 番目をご紹介します。

創造主に立ち返る人々を、世界的スケールで起こすこと—これが艱難時代の 2 番目の目的なんですね。 艱難時代は、人類史上最も短い時間に 最も大勢の人々が、キリストの福音を信じて神に立ち返る。言わば、大豊作、大祝福、そして大収穫の期間でもあるんです。

キリストが十字架に掛かれる数日前のことです。弟子たちがイエスのところに来て質問しました。「イエス様、あなたがお越しになる時（再臨の時）、どんな前兆がありますか？」 終末預言について質問したんですね。それにイエス・キリストがお答えになっている場面です。

マタイの福音書 24 章 14 節

御国(みくに)のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。

御国のこの福音は、英語の聖書では the Gospel of the Kingdom (王国の福音)。すなわち、艱難時代の人が聞く福音のことなんですね。

艱難時代に生きている人々は悪の Kingdom (王国) の中を 7 年間くぐりますが、これは長く続かない。やがてキリストが地上再臨して、キリストの Kingdom (王国) が 1000 年続きます。千年王国です。

「イエスを救い主として信じなさい。そして千年王国／御国に入りなさい。神はそれを保証しているから。」これが御国の福音です。

それから終わりが来ます。これは艱難時代の終わり。「キリストの地上再臨があって、艱難時代を終わらせる」と言っているのです。その終わりが来るのは、**全世界に福音が宣べ伝えられて、すべての民族に証しされてから**なんですね。

悪がのさばり 大暴れする艱難時代を、なぜ神は 7 年間も猶予なさるのか？

艱難時代に生きている人々が、御国の福音を信じて受け入れるために必要な時間。

御国の福音が宣べ伝えられて、それを信じるために、一人ひとりに与えられている猶予期間だと言うこともできるんです。「神は艱難時代に生きている一人ひとりのことを本当に心に留めて、1 人でも多くの人がこの救いに与ることができるように願っておられるのだ」と言えると思います。

ところで、教会は艱難時代の前に 既に携挙されて存在していません。クリスチャンは 1 人もいません。では、いったい誰が全世界に御国の福音を宣べ伝えて、全ての民族に証ししてくれるのでしょうか。

ユダヤ人がその任務を担ってくれるんですね。

艱難時代の直前に 144000 人のユダヤ人ビリーバー（信者）たちが起こされ、宣教師・伝道者・あるいは 144000 人のパウロとなって、世界中に福音を宣べ伝えてくれるのだと書いてあるんです。

どこにそんなことが書いてあるんでしょう。**黙示録 7 章**に詳しく出て来ます。

実は、終末預言シリーズを続けて行く中で皆様から色々な質問を頂いていて、まだ全部答えきれてないので、関連する質問に答えながら今日のお話しをしたいと思います。

ヨハネの黙示録 7 章

1.その後 (のち)、私 (黙示録を書いたヨハネ) は四人の御使いを見た。

その後は時系列順のことではなく、黙示録独特の言い回しです。

ヨハネはパトモス島に島流しにされているのですが、次々に異なるビジョン・幻を見せられるんですね。今まで見ていた幻とは違う幻を見せられた時に、「これから違うトピックスを扱いますよ」というお知らせの枕詞なんです。「今までとは別の内容の幻を今から紹介します」と言っているのです。

ヨハネは**四人の御使いを見た**。御使いは天使です。天使も神の被造物ですが人間ではありません。神に仕える、神のミッションを担って実行する御使いを 4 人見た。

1.彼らは地の四隅に立ち、地の四方の風をしっかりと押さえて、地にも海にもどんな木にも吹きつけないようにしていた。

地の四隅は東西南北のこと。つまり全世界。

地の四方 (全世界) の風をしっかりと押さえて、地にも海にもどんな木にも吹きつけないようにしていた。

地球を揺さぶるような天変地異が起こるのを押し止めていた。

艱難時代の皮切り・スタートの号砲は天変地異です。それが起こらないように押さえているというのは、**黙示録 7 章前半**は艱難時代に入る前の、嵐の前の静けさの期間であることを指しています。

さて、艱難時代に入る前に、どうしても起こっていなければならない大きな事象があるんですね。それは、144000 人のユダヤ人伝道者が起こされることです。

2.また私は、もう一人の御使いが、日の昇る方から、生ける神の印を持って上 (のぼ) って来るのを見た。彼は、地にも海にも害を加えることを許された四人の御使いたちに、大声で叫んだ。

「私たちが神のしもべたちの額に印 (いん) を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を加えてはいけ
ない。」

艱難時代はまだスタートしていません。艱難時代の天変地異が起こる前に、「神のしもべたちの額に印を
押してしまうまで、地にも海にも木にも害を加えてはいけない。その災いをストップしておきなさい。」

ここで質問に答えたいと思います。

もう一人の御使いが、日の昇る方から;ある方々は、これを日本人クリスチャンだと教えているようです。

「日の昇る方は東だ。イスラエルから見て一番東は日本だ。日の昇る方から来る御使いたち/日本のクリスチャンたちがユダヤ人たちに伝道し、ユダヤ人の霊的回復に大いに用いられ、世界のリバイバルの火付け役をするのだ！」

「今まで福音に心を閉ざしていたユダヤ人がそんなに心開くのは、日本人とユダヤ人は同じ先祖から出て来た子孫だからだ/日ユ同祖論 (にちゆ どうそろん)。外国人に言われるのではなく、遠い親戚というか、兄弟から言われる言葉なので受け入れるんだ。」

このような説明をする日ユ同祖論という独特な考え方があるんですね。私はナンセンスだと考えます。

まず、もう一人の御使いを“人間”と読む読み込みはアウトだと思います。

1.その後、私は四人の御使いを見た。この御使いは“天使”と解釈します。

ところが、2節に同じ御使いという言葉が出て来ているのを“人間”と解釈するのは、聖書解釈の原則から逸脱していると言わざるを得ないですね。

聖書解釈の原則は、1つの文脈に同じ言葉が複数回出て来た時は、最初に出て来た言葉の意味を2番目の言葉にも適用する。これは普通の文章の解釈でも原則だと思いますよ。

ですから、1節の御使いを天使と解釈するのなら、同じ文脈で語られている2節のもう一人の御使いも、当然天使と解釈するのが真っ当な解釈だと考えられるからです。

更に、もう一人の御使いの意味。黙示録にはもう一人の御使いという言葉が4回出て来ます。

この御使いの仕事はいずれも重要なミッション。大仕事。特別重要な仕事をする時に、もう一人の御使いが出て来るんですね。

この御使いの名前は出て来ません。聖書にはたくさんの御使いが出て来ますが、名前が紹介されているのはミカエルとガブリエルの2人だけ。他の天使の名前が無いというのではないと思います。

しかし伏されているんですね。これは、おそらく神様の知恵だと思いますよ。

人間というのは、神の重要なミッションを成し遂げる強力な御使いに名前があると、御使い礼拝／神ではなく御使いに注目して御使いを拝む。これ、キリスト教の異端で必ずやらかすことですねえ。

だから、重要な御使いであればあるほど、名前が伏せられてるんです。

もう一人の御使いはすっごい重要なミッションを担っている、黙示録で4回出て来るあの御使いのことだというのが、黙示録を通して学んでいくと分かるんですね。

ここに日本人クリスチャンを放り込むのは、私はナンセンスなことだと考えます。

さて、私（御使い）たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、

この印を受けている者は、神に所属している者です。

4.私は、印を押された者たちの数を耳にした。それは十四万四千人で、イスラエルの子らのあらゆる部族の者が印を押されていた。

やがて艱難時代後半3年半には、キリストを拒む人たちの額か右手に獣の666の刻印が押される。

刻印が押されることによって“その人のものです／その人に所属しています”ということになるんですね。

神のしもべたちの額に印を押す。144000人はどんな迫害に遭っても信仰を捨てません。

どんな事があっても守られ切って、艱難時代の7年間生き通す人たち。生き通さないと駄目です。

最後の最後に至るまで、宣べ伝えることをやめないから。一人残らず、地の全ての人間に御国の福音を宣べ伝えるために遣わされる人たちで、彼らの大活躍のうちに福音が広がっていきます。

もう1つの質問にお答えしたいと思います。

144000人のイスラエルの子供たち。なぜ144000人なのか？アブラハム・イサク・ヤコブを族長と言います。ヤコブに12人の息子が生まれました。娘たちも生まれますが息子が12人。

ヤコブは後に神様から改名を命じられ、イスラエルという名前になりました。

イスラエルに12人の息子がいて、それぞれ族長になったのでイスラエル12部族といます。

12 部族の中から 12000 人ずつが艱難時代の特別な宣教師になって、世界中に出て行きます。
12 x 12000 = 144000。

けれど、黙示録に 12 部族のリストが出て来るのですが、ダン部族が出て来ないんです。

5.ユダ族から一万二千人が印を押され、ルベン族から一万二千人、ガド族から一万二千人、アシェル族から一万二千人、ナフタリ族から一万二千人、マナセ族から一万二千人、シメオン族から一万二千人、レビ族から一万二千人、イッサカル族から一万二千人、ゼブルン族から一万二千人、ヨセフ族から一万二千人、ベニヤミン族から一万二千人が印を押されていた。

今 12 の部族名を言いました。しかし、ダン族が入ってない。

そこで、ある方々は「やっぱり反キリストはユダヤ人から、ダン部族から出て来るんじゃないか。このリストからダン部族が外されているから。」

これまた突飛な考え。このように思ってしまう下敷きは、反キリストはユダヤ人から出るという固い信念。これがあると どうしてもそこに結びついてしまう、というのも分からないわけではないんですが。

なぜダン部族が入ってないのか。ハッキリ書いてないから私も断言は出来ません。

しかし、類推できる、聖書が提供している情報があります。

イスラエル 12 部族のリストは旧約聖書・新約聖書全体の中で 29 回出て来て、それはいつでも 12 で止まっています。12 部族だけ。つまり、聖書は 12 という数にこだわっているのです。

さて、イスラエル（ヤコブ）に生まれた 12 人の息子の 11 番目はヨセフです。

ヨセフに 2 人の男の子 マナセとエフライムが生まれました。イスラエル（ヤコブ）から見ると孫ですよ。ところが イスラエルが亡くなる前に、孫のマナセとエフライムも部族長として認めたんです。

今までは息子 12 人でしたが、ヨセフの息子 2 人が族長になったのでヨセフ族が 2 つに分かれ、合計すると 13 部族。それを無理やり 12 部族に収めようとすると、どこかの部族が 1 個、玉突きで弾かれてしまうんですね。

29 回出て来る 12 部族のリストを見ると、同じ部族がそのリストに入っているんじゃないんです。

あるリストではレビ族が玉突きで出され、別のリストではシメオン族が省かれています。

省かれてしまった部族は、その後の聖書の記述の中でイスラエルとして認められていないかという、全然そんなことはない。ちゃんとイスラエル部族の一員として取り扱われています。

そして、次のリストでは復帰してたりするんですね。

聖書全体の中で 12 部族のリストはどんな扱いになっているのかというと、12 という数にこだわっている。12 に数を合わせてイスラエル全体ということをする時に、このリストが採用されることが多いんですね。それを下敷きに考えると、黙示録のリストでダン部族が省略されているのは、部族の数を 12 に合わせるためだった。それ以上でもそれ以下でもない、と捉えるのが聖書的ではないかと私自身は考えています。

さて、144000 人のユダヤ人伝道者の活躍の結果、どんなことが起こったのでしょうか。

黙示録 7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民（くにたみ）、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。彼らは大声で叫んだ。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」

144000 人の伝道活動の結果、全世界の全ての民族から、誰も数えきれないほどの大勢の人々が救われた。そして、これは天での光景なので、彼らは殉教してるんです。

この時代にイエスを信じるといことは、命を引き換えにする覚悟がない限りできないこと。

7年間の最初の3年半は、世界統一宗教によってイエスを信じることが禁じられる。

後半の3年半は、反キリストによって彼を拜むように強制される。

ですから この7年間を通して、御国の福音を信じるとは至難の業なんです、144000人の活動によって、たくさんの人々がイエスを救い主として信じた。

すなわち、**艱難時代は世界的スケールの大リバイバルを起こすために必要な期間だ**、とすることができますと思います。

大迫害の中でそれでも信じた。なぜ信じたのか？ 3つ理由があると思うんですよ。

●それほど144000人のユダヤ人信者のメッセージには説得力があった。

●全世界の人々は、艱難時代の前に起こった衝撃的な事件を記憶の中に留めているんです。携拳です。知り合いのクリスチャンたちがある日突然、忽然と姿を消した衝撃の事件。

いったいなぜなのかをずっと考え込んでいたんじゃないでしょうか。

それを見事に解説するのが144000人のユダヤ人信者です。

●艱難時代は、黙示録に書いてあることが次々に自分の目の前で成就する時代なんです。

多くの聖書預言は、書いてあっても実現するのは何十年・何百年先ということがありますよね。

でも艱難時代はそうじゃない。今まで預言されていたことが、集中豪雨のようにこの7年間に実現する。それを見たら、もう信じざるを得ない。

というか、認めざるを得ないというのが正直なところじゃありませんか？

「自分が今まで考えていたのは全然違った。実はイエス・キリストこそは全人類の救い主、私の救い主で、人となられた神であった」ということが分かるようになる。

もう1つ、彼らの救いに役立つのは、携拳されたクリスチャンたちが残した数多くの書物や録音されたメッセージ、動画ではないでしょうか。同国人が自分の文化を使って、母国語で伝えてくれる聖書のメッセージはやっぱり響きますよ。

ということで、『ごうちゃんねる』も今生きている時代の方々だけではなく、やがて来るべき時の同胞日本人に役に立ったらいいなあと思いながら録画しています。

どうぞ、チャンネル登録をお願いします。登録者が増えると、色んな所に関連動画としてAIがアップしやすくなるんですね。そうしたら、より多くの人たちがこの動画を見る機会が増えるのではないかと思いますので、よろしければチャンネル登録をよろしくお願いします。

寒いですね。みなさん、お風邪などひきませんように、お元気で暮らしてください。

ではまた、お目にかかりましょう。さよなら！

☆使用した聖書は「聖書 新改訳 2017」です。